

2025年12月21日（降臨節第4主日、A年）

メッセージ

「神を求めるところに」

（マタイによる福音書1:18-25）

司祭ヨセフ太田信三

「イエス・キリストの誕生の次第はこうであった。」と始まる今日の福音。直訳すると「イエス・キリストの起源はこのようであった。」です。ここで「起源」とされた単語は「ゲネシス」というギリシャ語で、マタイによる福音書1:1「系図」にも同じ単語が使われています。今日の福音は、産まれてくる子が誰であり、どこから来るのかを説明する箇所だと言えます。

「ゲネシス」という単語は、旧約聖書のギリシャ語訳では創世記のタイトルとされ、英語でも創世記は「Genesis」ですから、今日の箇所のイエス誕生の物語と神の創造の物語が重ねられていると読むことができます。創世記では、神が世界を創造し、すべての命を祝福します。けれども残念ながら、人は神のもとを離れてしまいます。それでも人を救おうとする神と、繰り返し離れる人間の物語は、旧約聖書の終わりまで続きます。しかし神は、イエスによって再びすべての命とご自分との関係を回復されるのです。

すべての命、世界の再創造がイエスによって開始されます。神の祝福から離れ、孤独や苦しみに生きる人間を、神が再びご自分のもとへと集める。そのために、まことの羊飼いとして御子がわたしたちのもとに遣わされます。

創世記とイエス誕生の物語を見るとき、カインによる弟殺しと、ヘロデによる嬰兒大量虐殺を重ねずにいられません。神による創造の直後にも、イエス誕生の直後にも、人が人を殺す出来事が起こります。このことは、カインから私たちまで、人が変わることなく罪深い存在であることを明らかにしています。カインは弟への嫉妬で弟を殺します。ヘロデも、嫉妬や自らの地位が脅かされることへの恐怖からです。ここに、リアルな人間の姿を認めなければなりません。自らを王とするのが人間です。私たち皆がカインとヘロデと同じ人間です。

神から離れることが「罪」だと聖書は伝えます。その人間の実態は、かくも恐ろしいものです。そしてその姿を自分自身のうちに認めるとき、私たちは自らに頼るのではなく、神からの助けを求めずにはいられなくなるはずです。そして、そのことこそが悔い改めの入り口なのです。その悔い改めの入り口に立つ時、わたしたちにもヨセフの信仰への道が開かれます。ヨセフが聖霊を受け入れたことでイエスが誕生したように、私たちも神を求め（悔い改めの入り口に立ち）、聖霊をお迎えし、その聖霊によって変えていただくとき、心から自らのこととして救い主の誕生を祝う者とされるのです。